

東日本大震災地の学校生活 —こどもと教師のこころの問題—

School Life at the Area of East Japan Great Earthquake Disaster
—Problem of the heart of Children and Teachers—

寺井 弘 実
Hiromi Terai

〈要旨〉

平成23年3月11日に起こった「東日本大震災」は、被災地に住む人々の「日常の風景」を一変させた。人間が長年の間、築いてきた田畑・家・仕事場、・・・全ての「もの」を、一瞬のうちに消し去った。「受け継いできたもの・作り上げてきたもの」をゼロにしてしまった。自然の風景さえ変えてしまったのだ。そして、ここからは「人のこころの風景」を変えていこうとしている。現在は、視覚的な変化が明らかな「ものの消失感」が、現在の人々のこころの多くの部分を占領している。しかし、今後は視覚的には見えない「身近な人の消失感」「生活環境の激変」からくる「こころの風景」の変化が、これから生じてくる可能性が高まる。震災地・石巻市内の小・中学校にスクールカウンセラーとし入った際に出会った、こどもたち・教師の姿から見てきた「こころの風景」と「こころの支援の今後の課題」を考察する。

〈キーワード〉

東日本大震災、こころの支援、スクールカウンセラー

I：被災地へのスクールカウンセラー派遣

平成23年3月11日に起こった「東日本大震災」は、東北地方一帯に甚大な被害を及ぼし、生活基盤を破壊した。また、福島県の原子力発電所事故は現在もまだ終息しておらず、住民の将来への生活不安は想像を絶する。

このような状況のなかで、宮城県石巻市内の被災した小中学校は4月下旬から始業式、5月連休明けから授業再開を決めた。これに伴い、文科省は4月13日、東日本大震災で被災した児童生徒のこころのケアをするため、被災地の小中学校などに、臨床心理の専門的知識をもつスクールカウンセラーを新たに配置することを決めた。新学期を迎えた教育現場からは、震災で家族が亡くなったり、津波の恐怖体験や長期の避難所生活、また、転校先での新たな適応などから心身に問題を抱える児童生徒がでる可能性が懸念される声がでており、このような児童生徒のこころのケアが急務であることからの緊急派遣である。

宮城県教育委員会からは、「学校側は一人のスクールカウンセラーを1年間通して配置してほしいという要望であった。しかし、現状は無理なので今回のような巡回方式になった」との説明がなされた。

スクールカウンセラーの緊急派遣者は、全国臨床心理士会に所属する臨床心理士に呼びかけられた。教育相談機関に勤務経験がある筆者は学校現場・教員との関係が深く、また、小中学校スクールカウンセラーとしての勤務経験もあり、「今、自分が学校現場で役立つことがあれば!」との思いで派遣要請に応じ、6月6日から10日までの期間、石巻市内3校の小学校・2校の中学校にスクールカウンセラーとして派遣され、管理職との懇談・教職員の相談・児童生徒との関わりの業務を行った。また、避難所となっていた中学校では、給食配膳の手伝いを通して被災場所でこどもを育てている母親たちとの出会いや県の被災者臨時雇用で働く被災者のかたたちとの関わりもあった。

そこから見えてくる「こどもと教職員のこころの問題」「こどもを抱える母親の気持ち」「将来に対する気持ち」に関しての報告と「今後のこころの学校支援の課題」を述べる。

II：学校の現状

1) 被災した学校の現状

派遣された5校のうち、校舎被害がなかったのは、中学

校1校のみで、残りの4校のうち3校は全施設津波被害、1校は校舎1階浸水で使用できない状態。そのために、他校の校舎に間借りしての学校生活である。1つの小学校は低学年と高学年の2グループに分かれて、それぞれ別の学校に間借りしていた。自宅、あるいは避難場所（体育館など）からスクールバスに乗り、がれきが積まれた校区地域を通して毎日通学してきていた。他校の空教室を間借りしているため、多くの教室は半分で区切って使用されていた。簡易な仕切りのために、隣のクラスの声が聞こえていた。特別教室（理科室・音楽室など）の利用は、本校の使用状況をみながら利用しており、教員の遠慮が見てとれた。

また、校長室は放送室の一角にある学校が多く、「今日、やっと校長室ができたよ。職員の前では広げられない書類もあり、やっと仕事らしきことができる」と語った校長もいた。

また、地域全滅で家族で転居したために、こども数が半分に減っている学校もある。

唯一校舎被害のなかった中学校は、体育館・校舎の半分以上がまだ避難場所になっており、住民・ボランティアの人たちが校舎内を歩いていた。筆者が派遣された日は、関西の美容師グループが10人ほど校舎内と校庭で臨時美容室を開いており、数人の被災者のかたが利用していた。理科教室は避難場所で使用できておらず、学校側としては「そろそろ理科の実験授業を行いたいと思っているので明け渡しを交渉中」と教頭は話してくれた。また、校庭の3分の1は自衛隊が設営したシャワー室・自衛隊の車・ボランティア関係者の車が駐車しており、使用できない状態である。空きスペースで体育・部活動が行われていた。

このような状況のなかで、派遣された学校の全てで給食は再開されていた。「学校たより」も出しており、6月発行のある小学校たよりには、

「給食にご飯がでるようになり、おかずが一品増えたことをお知らせしました。最初のご飯の日にはおかわりをするこどもが多くいました、野菜不足を補うために、本日から野菜ジュースが週に1回提供されることになりました。」と親への連絡がなされていた。

また、5月には写生会の行事も行われていた小学校もあり、できる範囲の行事を実施していきたいという学校側の姿勢が伺われた。

また、「出前授業」として、国内の著名な作家・科学者・音楽家などがチームを組んで来校して、一緒に食事をしたり、講演会をしたりという時間が、特に中学校で数回行われていた様子が校舎内の壁に写真記事で大きく貼られていた。生徒の温泉への宿泊体験、さらに、マスコミ取材も多く、何十枚のマスコミ関係者の名刺を見せてくれた学校もある。現在も、ある特定の生徒を長期間取材している局も

あると伺った。

校舎が被災して間借りしている学校と、被災がなく平常の学校生活を送っている学校との教職員間の交流はなく、間借りしている学校側職員の遠慮感を覚えた。

（新聞記事：学校給食再開の記事）

〔河北新報：平成23年6月10日〕

学校給食施設
2カ所再開へ

仙台市教委は、東日本
大震災で被災した加茂学
校給食センター（泉区、
対象校10校）を27日に、
荒巻学校給食センター
（青葉区、23校）を7月

1日に再稼働する。これに
伴い、市内6カ所の給食
センター全てが再開する。
市教委によると、加茂
は平常通りの給食を提
供する。荒巻は被害の程
度が激しく、8月の改修
完了までは調理室の一部
を仮復旧させ、煮炊き調
理のみの給食で対応す
る。

2) 子どもたちの学校生活の現状とこころ

どの学校の職員室にも、配られていない支援の文具が多数置かれてある。こどもたちには、新しいノート・筆箱・筆記用具など文用具がいきわたり、ランドセル・教科書も新品であった。廊下に置かれている「絵本」も支援物資の新品であった。体操着も一人一人に配られていた。

そんななかで、泥のついた教科書が何冊も太陽の照る窓際に干してあり、津波の現実を伝えており印象的であった。

ある小学校の「学校だより」には、

「支援物資が今も毎日のように届いています。児童一人一人に対する支援はもちろん、教育活動や学校運営に必要な物資が国内外の様々な団体や個人から寄せられ、おかげさまで学校が平常に近い形で運営できております。大変ありがたいことです。」と書かれていたが、実際、教育活動に必要な最低限の備品は満たされていた。

こころの状態に関しては、表面的であるがこどもたちは、学校生活では平常通りの学習をし、平常通りの遊び時間を過ごしていた。休み時間には、数人でトランプを楽しむグループ、校庭で教師とともにボール蹴りを楽しくグループなど、どこにでも見られる休み時間風景があった。

それでも、ある教師からは、「余震があり、少しでも揺れると、子どもたちの表情が急激にかわるのです。授業も余震で中断することもあります」と、こどもたちが震災体験で深い不安感をこころのなかに抱えていることがうかが

えた。

そんななかで、心身の問題が表面化している児童・生徒もいた。以下はいくつかの事例である。

1, □小学校高学年：主訴・「学校のトイレに入れない。些細なことで泣く」

避難所で生活している児童。同じ避難所に同じクラス仲間が2人いて、日常生活が全て見られている状況。本来は家庭内で守られているはずの幼稚な行動様式がオープンとなり、それが「からかい」の対象となっていることが明らかになった。

＊原因は、学校体育館での避難生活という状況が生み出していた。現在は親の協力を求める状況ではないので、担任に「からかい」をする児童への指導と本児童への甘やかし方を伝えた。

2, □中学生：主訴・倦怠感があり早退が続く。

避難所で生活しており、早退すると周りの視線が気になり、落ち着かない様子。養護教員は、帰宅させる時期に迷っていた。

＊原因は、避難所での生活疲れと、周りの視線が気になるという思春期特有の心理が重なっての不安感が身体に出現していた。養護教員には、避難所に帰宅させるよりは、保健室で出来る限りの時間を休ませてあげてほしいと伝えた。また、間借りの保健室のため、ベッドに仕切りのカーテンがなかったので、せめて、枕の向きを変えて、視線が寝ている本人と入室生徒と合わない様にベッド配置を変えてほしいと伝えた。

3, □小学校高学年：主訴・吐き気が止まらない児童

：主訴・橋が揺れるので渡れず不登校

どちらの児童も、「死体をたくさん見た」「揺れることが恐怖」と、原因が震災であることが明確であるので、親と連絡をとりながら学校側は慎重に経過を見守っている状況とのことであった。

震災からの時間の経過とともに、こどもたちの精神面も変化していくと考える。個人的なパーソナリティや生活状況、そして被害状況の程度などにより、「こころの問題の現われ方」は異なるであろうが、しかし、息の長い大人の見守りが必要であることは明確である。育ってきた家や町が崩壊して、がれきとなり、また、そのがれきのなかを毎日通っての通学である。バスの中から見える風景は、こどものこころに強い印象を与えている。

バスのなかで、「私の家は、あそこにあったよ・・・」と声をかけてくれた小学生が印象的であった。

その点に関しては、ある学校の校長先生が「子どもたちの落ち着きが表面的であることは理解しているが、今は平常の学校生活を取り戻すことが一番であり、そのなかでこ

どもを見守っていく」と語り、こどものこころの問題を理解していることをさりげなく伝えてきた。

写真1：A小学校 校区内の被災状況



3) 教員の学校生活の現状とこころ

今回のスクールカウンセラーとして入った小学校・中学校の教師のなかには、ご自身が被災者であるかたもいた。「半年前に新築した自宅は、見事に何もありません。今は教員宿舎での生活です。汲み取り式の便所でないのありがたいです」「自宅は流されて何もありません。今は親戚の家にいます。管理職は背広がいるが、今着ているこの背広は先週買った。暑くなるので、安い夏物を買いたい。」とさりげなく語る。身内を亡くされた教員もあり、周りの職員同士の配慮も感じた。

また、津波が襲った時間帯は、教員は学校での勤務時間であり、校舎まで波がきた学校の教員の自家用車は全て流されたとのことである。「車が、アッといまに流されていくのです。一週間前までは、校庭には流されてきた車が重なりあっていました。今は、きれいになりましたが・・・」このような想像を絶する困難ななかで、お会いした全ての教員のかたからは、今こそ教員同士で団結して、「学校を平常通りの流れにしたい」という強い気持ちを感じた。

ある小学校の「学校だより」には、以下の文章が書かれている。

‘平常心を保つこと’

震災から80日を過ぎ、地域が学校が少しずつ平常時の姿を取り戻してきています。学校においては、その使命の第一は授業を通して児童の心身の成長を確実に促すことですが、本校の子どもたちも間借りの校舎や通学手段に慣れ、学習に集中して取り組んでいる毎日です。嬉しい限りです。児童にも学校にも‘平常心’を保たせること。これが今こそ最も大切なことと考えています。

多くの教員の代表的な気持ちが明確に書かれてあり、印

象的である。

この気持ちを具体化している授業を見た。小学校3年生の「理科」の単元は「蝶のさなぎの観察」であった。3～4人の児童グループの机の上には、プラスチックの入れ物のふたに「本物の蝶のさなぎ」が置かれていた。決して、写真で済ませたりしないで、「本物の蝶のさなぎ」が、子どもたちの目の前にあった。このような非常事態のなかで、教員はいつ、どこから、複数のさなぎを見つけてきたのだろうか？また、見つけてよう！と思ったのだろうか。教員の授業への真剣さとともに、「本物の蝶のさなぎ」は、教員の「学校の平常時の姿を取り戻したい」「平常心を保っていく」という意志表見であると強く感じ、頭が下がった。

一週間後、金沢市に戻り、小学校3年生の「理科」の授業を参観した。児童のグループの机の上には、「本物の蝶のさなぎ」が置かれ、観察をしていた。たとえ、被災地であっても「同じ教育を子どもたちに」という教員の熱意を改めて強く感じた瞬間であった。

また、ある小学校では、「急に予定していた授業ができなくなったので、何か授業をしてほしい」と6年生担任から頼まれた。「震災に関連した、心理面の内容ですか？」と尋ねたら、「震災関連でなくてよい。ごく普通の授業をお願いします」との返事であり、6年生という学年から「思春期のころ」の題名とし、エンカウターの要素も取り入れた内容で実施した。担任も参加して、意義深い時間であった。最後には、「大人というのは何歳からと決まっていますか？」との質問もで、「個人個人違います。大人になるには、努力が必要だよ。これから大人になっていこう」と返答した。

教員の頑張りや努力のパワーは全開であったが、このパワーが長い期間継続していくとは考え難い。ある教員が「もう、笑い飛ばしていかないと、今の事態はやっていけないよ」と語り、また、ある教員は「毎日のスクールバスでの移動の付き添いと校舎の往復で、肉体的疲労している。今は、目の前のことをやり、こどもに学校を開いていくこと。それだけです。」と疲労感を打ち明けた。実際、体調不良を訴えて早退していく教員もいた。

さらに、校舎が被災した学校の、今後の再建計画が全く見えてこないことも教員の疲労に追い打ちをかけている。

「校舎は新しく建つのか？建つとしたらどこに建つのか？そして、いつまで、間借り校舎生活なのか？そして、学校名は残るのか？学校統合か？」全てにおいて、なんの通知も現在のところないとのことである。

ハード面である、「自分たちの校舎での学校生活」を一刻も早く教員に提供することが急務であろう。間借り校舎での精神的疲労感・毎日のバスでの児童・生徒の送迎時間

に費やす肉体的疲労は行政的対策で軽減できることである。

教育委員会は優れた工夫とアイデアを絞って、一刻も早く、校舎を提供してほしい。まず、そこからの教員の支援であると考え。教員の精神的安定なくして、こどもの精神的安定はない。

Ⅲ：保護者・地域との関係

I) 保護者のこころの問題と学校

保護者も被災者であり、精神的に不安定であるのは当然である。ある学校長は、

「多くの親は、仕事がない・住宅がない・復興のめどがない。この3つの『ない』が、親の攻撃性をひきだしている。そして、教員という仕事がある私たちに、その攻撃性を向けてくる時がある。また、保護者の中でも仮設住宅に入れる・入れないなどの差が出てきていて、保護者間でも感情的にギクシャクし始めてきた。今後、もっと大変になるのではないかと心配している」と話してくれた。

「こどものこころの問題」と「親のこころの問題」とは密接な関係があることは明確であり、親のこれからの就業問題は国の復興計画であり、その点でも、一刻も早い復興計画の実行が待たれる。

そんななかで、国の計画を待たずに、自分たちの住む地域を自分たちが復興計画を立てて、その青写真を校長先生に持参してきた人がいた。生まれ育った地域は、自分たちが一番知っているという思いである。その思いを美術専攻のボランティア学生が絵にしてくれていた。高台に住宅と老人専用アパートを建設し、海側には働く場所。小学校も描かれていた。行政政策を待つだけではなく、自主案することの必要性こそ、本来の復興計画ではないかと新しい視点を教えてもらった。マスコミでもとりあげられており、今後の行方に強い関心をもっている。

写真2：B中学校の傍に建築中の仮設住宅



Ⅳ こども・教師のこころの問題と今後の課題

想像を絶する甚大な被害は、確実に人々のこころに影響を与えている。その程度は計りしれない。こどもにも、大人にも同じように。そして、その被害からのこころの問題が表面化してくるのは、これからの時間経過のなかであろうということは、誰でも想像できよう。

避難所で出会った小学生3人のこどもをもつ母親は、「今から、金銭的に大変だから、こども服は支援物資です。夫は瓦職人で今は忙しいけど、これまで仕事は暇だった。」と、淡々と語り、また、臨時雇用者として避難所で働いていた60歳の男性は海岸近くで鮮魚店を営んでいたとのことで「中古の冷蔵庫を買って、また、商売を始めたいね。それしかできないから……。海はいいよ」と、穏やかに語る。また、明日には避難所を出て仙台の息子と同居するという70歳の女性は、「この年でこのような体験をするとはね……。住んでいた地域はもう住めない地域に指定されたからね。出ていくしかないね。」と、やはり穏やかに、声も荒げず話してくれた。受けて自然災害の現実を静かに受け止める東北のかたの力強さを感じた。

また、学校現場でも、何人かの先生がたの言葉のように「毎日、笑い飛ばして、やっていくしかないよ」「震災のことは、話してもどうにもなりません。毎日、こどもとの授業です。教師の仕事ですから」という前向きな姿だ。

しかし、このような言葉以外にも、「教員生活で大事にしていた宝物の教材が全て流れてしまった。こころが流れてしまったようだ。」「今回の震災で人生観を変えてしまった教員がいる」など内面の隠れた言葉も聴かせてもらった。どちらも、あるのであろう。

そのなかで、私が印象に残ったのは、ある教師の次のような言葉である。

「防災避難マニュアルというのは、たしかに無駄ではないと思う。しかし、いざ、今回のように想像を超えた事態が生じたとき、一瞬の判断を必要とした時の状況判断力はマニュアル判断ではだめだ。自分の頭で考え、そして判断することが必要だと痛感した。教員が教えることだけを学ぶのではなく、いろんな考えかたを吸収して、また、疑問をもって考えて、判断できる力をもつこどもを私はこれから教師として育てたいと思う」。

こころに響いた。

今回、子どもたちが毎日通う「学校」という場所に、他県の相談員が入り、先生方には戸惑う方もいると思い、できるだけ学校の日常を壊さないように配慮した相談活動をしてきた。

しかし、今、学校側が「短期支援疲れ」を語り始めている。物質面・こころの面共に、「緊急性の強い短期的支援」よりも、「長期的な支援」を求め始めている。

「こころの支援」では、相談の窓口を継続的、かつ、長期に開く必要がある。「こころの問題」は、これから表面化する可能性が高まると考える。

「物質面」では、今、何よりも、「間借り校舎」からの脱却が第一課題であろう。「間借り校舎」は先生方の心身のエネルギーを大きく奪っている。1つの校舎に2つの学校が存在する遠慮・気遣いは明らかであった。

早速な対策として、仮校舎を建てる・空いている建物を校舎として使う・学校統合も考えてみるなどの決定が必要である。児童生徒数が避難したために半分以下になった学校もあり、再統合の必要性も考慮される。

「教員が心身の健康が保っている期間」に、「保護者の教育不安が高じない期間」に、「こどもたちが元気なうち」に、とにかく早速な決定が必要であると考えられる。

これからの日本を、東北を、支えていくのは、こどもたちであり、そして、こどもたちを教育していくのは学校の教員である。現在のような「教員の熱意」に頼った教育現場では、教員の疲労感が蓄積する。教員個人の熱意ではなく、学校再建の構想だけでも、一刻も早く公表すべきである。

今回の派遣で出会った学校関係者に、「日本の教育現場の力」を見せていただきました。出会った全ての先生に感謝いたします。

写真3：C小学校の校区の震災前の姿：美しい海



